

## 「大屋島」の復活を願って

ここに「大屋島」と題された小冊子があります。屋島史蹟顕彰会が発行した古い屋島の観光案内本で、初版は昭和10年発行です。書き出しから、「大屋島！秀麗な屋島！霊山屋島！」と、屋島をこよなく愛していた、編集者森田惣吉氏の興奮がそのまま伝わってくるような冊子です。

ある人が屋島を「日本のダイヤモンドヘッドだ」と評していました。あのハワイ・オアフ島のシンボルである山に擬したのです。確かに、ワイキキの浜を手前にして海に突き出たダイヤモンドヘッドの景観は、高松の海岸から見た、瀬戸内海に突き出た屋島のものと似ていなくもありません。冊子「大屋島」の中でも、「屋島は山容美で…富士山とも相並んで…天下の二大模式の秀峰である。」とあり、「屋島は風光に、史蹟に、天然記念物に、信仰に諸要素を備えて、海上公園の王座として、国宝的価値を有するに至ったのである。」とまで褒めそやしています。

高度成長期には、修学旅行のメッカとして大勢の客でにぎわった屋島の観光も、瀬戸大橋開通時ににぎわいを最後に、長期低迷しています。平成18年の水族館のリニューアルにより、若干プラスに転じたこともありました。近年はピーク時の4分の1程度の年間60万人前後で推移しています。ただ、最近になって、長い間懸案となっていたホテルや旅館の廃屋が相次いで撤去され、好ましい状況も生まれつつあります。日本書紀に記された古代山城「<sup>やしまのきあと</sup>屋嶋城跡」の発掘調査も進んでいます。

屋島は、ほぼ山全体が国立公園であり、史跡であり、天然記念物です。特に山頂においては、開発や現状変更が著しく制限されているため、利活用策のアイデアが出て、実現に至らず、手詰まりになっていました。それを打開しようというのが、この度設置する「屋島会議」です。環境や文化財や芸術などの専門家と、市民、関係機関が一堂に会して屋島の将来ビジョンを明確にし、最適な保存・利活用を考えていこうというものです。

来年の大河ドラマは、屋島にも縁の深い「平清盛」です。この機会に、「大屋島」の復活の手がかりが見つかることを大いに期待したいと思います。

平家ゆゑ名のあはれなるこちして

遍路と入りし屋島寺かな

与謝野晶子